

△解答▽

- 1 あじわい
- 2 工
- 3 塩を添へたる湯漬け
- 4 思いがけず得た感動を再び味わうのは難しいという共通点。

△解説▽

- 1 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。
- 2 「思ひまうけて」(期待して)と、直後にある「はからずして」(何も考えず)が対応していることに気づくこと。また、その後にある、「うまきは思ひよらざる所にある」という文もヒントになる。
- 3 「粗食」とは粗末な食べ物のこと。具体例を尋ねられているので具体的な食べ物の名前をさがす。「湯漬け」とはお茶漬けのように、ご飯に湯をかけたもの。
- 4 「感動」が思いがけないものであること、その「感動」を再現するのはむずかしいということ、の二点をおさえること。

△大意▽

人にもてなされた食べ物をおいしいと思ひ、それを家で作つて食べると、外で食べたときよりおいしくはない。なぜならば(それは)家では(うまいはずだ)と期待して食べるからである。食べ物、何も考えず(期待せずに)食べるものにおいしさがある。だから、粗末な食べ物といへど、おいしさは思ひがけないところにある。また、その時と場所と、自分のお腹のようすにびつたりとあてはまり、口になうものよりおいしい物は決してない。塩を添えた湯漬けであっても、空腹の時は、山海の珍味よりもおいしいものだ。絵の道も同じである。初めに(絵を)画いたように(かこう)と思つても、それを写し出し(初めの)絵のすばらしさ、筆の勢い、墨の色すべてにおいて、前と同じようにはならず、ふたたびまねることができるとどめつたにないことである。

△解答▽

- 1 あらそう
- 2 才
- 3 (1) 「A」エ 「B」ア
- 4 (2) 売る人の言つとおりの値段で品物を買っていた。

△解説▽

- 1 語頭を除き、「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。
- 2 傍線部を含む一文に注目する。「商人はみな同じで、物の値段のかけひきをするのが世の常なのに、どうしてこのように言われるままになさるのか。」とある。傍線部はその直後の内容を表していると読み取れるので、同じ内容を述べている才が正解となる。
- 3 (1) 直前の新右衛門のセリフから考える。新右衛門は売る人たちのことを「日ごと」に重きを(略)いふべくもあらじ」、自分ら商人のことを「おのれらは(略)家業を営む」と述べている。この箇所と同じ内容を表す選択肢を選ぶ。
- 4 (2) 3～4行目の、家内の者のセリフから「言われるままにされるのか(応じるのか)」とある。注意点として8～9行目にも同じようなことが述べられているが、こちらにはその行動の理由も併せて述べられていること。設問は「していたこと」を尋ねているので、その行動の理由は含めない。
- 4 「どんな気持ち(略)」と問われているので、答えは「な気持ち」と答える。その上で、傍線部の直前に注目する。「新右衛門が情けある」とは、つまり「(売る者に対して)新右衛門が温情を持って(商売して)いる」ということであり、そのことを知った売る者も、その気持ちに報いようと値を安くしたのである。

△解答▽

- 1 ウ
- 2 (1) 我に還せ  
(2) 井戸の中の子どもに取られた
- 3 井戸の中の子ども
- 4 子どもだけでなく父までも、井戸の水面に映った自分の姿を他人だと思っ  
て抗議した点。

△解説▽

- 1 訓読点は漢文に用いられている語の、左下に付けて使う。今回の問題は「毬子を弄び」の順に読める訓読点を用いた文を探す。「レ点」は、直後の一字を読んだから「レ点が付いている一字を読む」という決まりがあるので、ウ以外の訓読点の使い方では、問題文の通りの語順ではなくなってしまふ。
- 2 (1) 傍線②に「曰はく〔言つた〕と書かれており、その直後に言ったことが書かれている。古文の文中に出てくる会話文には「」が使われていないこともある。古文の場合、会話文の終わりには「と」が用いられることが多いので、会話文を探す手がかりになる。  
(2) 問題文にある「毬子を」に注目する。古文中では助詞が省略されていますが、3行目に「毬子(を) 井中の児に取らる」と書かれてあることが読み取れば、泣いている理由として、この部分を答えに用いることが分かる。
- 3 直前に「父が井戸の中をのぞいた」ことが書かれているので、「井戸の中(の水)に映った自分の姿」が見えているはず。しかし、直後の内容から父も自分の姿を井戸の中にいる誰かだと勘違いしていることが読み取れるので、父としては「井戸の中にいる子ども」の「親」に対して言っているということになる。
- 4 子どもが勘違いしている点でも笑いを誘うが、大人である親まで勘違いしているところが、この古文の愉快なところである。

△現代語訳▽

ある子どもが毬子(けいし)を(蹴けって)遊んでいると、偶然に蹴けって井戸に落としてしまった。すぐにうつぶせて井戸(の中)を見て、(井戸の水に映った)影(「姿」)に向かつて「私に(毬子)返して」と言った。父が(泣いている)子どもに(理由を)尋ねると、「毬子を井戸の中の子どもの取られた」と(子どもが)訴えて言った。父も井戸をのぞき込み、自分の(映っている)影(「姿」)を見て「おまえのうちの子どもが(私の)子どもの毬子を蹴けり(「使つかって遊び)たがっているが、うちの子はやりたがっていないとでもいうのか(「うちの子ども遊あそびたがっている)のだから返してくれ。」と言った。

△解答▽

1 いいあえり

2 (1) 士

(2) 杖が折れて、猪が倒れた。

3 (1) 士が、たいした腕前でもなさそうなのに剣術を教えていること。

(2) ウ

△解説▽

1 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」になおす。二ヶ所あることに注意。

2 (1) 杖で猪を打ったのが誰なのかを考える。「一字で」と問われていることに注意。

(2) 直後の文章の内容をpushさえること。「杖が折れたこと」を「猪が倒れたこと」の二つの内容が必要。

3 (1) 傍線部③と2行目の「人」が同じと考えられるので、その「人」が言った言葉をふまえて答えを作る。

(2) 直後の「年来の習練むなしからざる」に着目し、習練を続けることの大切さを感じていることをとらえる。

△大意▽

剣術を教えて生活をしている士(武士)がいた。年をとっていたので、たいした腕前でもないと、人々は言いあつた。あるとき、その士が朝早く起きて、門にたたずんでいると、偶然荒猪が駆けて来た。逃げられそうもなかったので、持っている杖で一度打つと、杖は細かったので二つに折れ、猪は倒れた。このことを聞いて、日頃納得がいかない者も、今、このように老いていたとしても、長年の習練が無駄ではないことを感じたということである。

△解答▽

1 ゆえ

2 息子が狼に襲われること。

3 ア

4 (1) 「A」ウ 「B」オ

(2) 息子の親を大切に思っている

△解説▽

1 「系」は古文特有のかな。「あ↓い」とともに覚える。

2 ——線②の直前にある「定めて狼に襲はれん」をpushさえる。「息子が」も入れる。

3 「子の行きしと思ふ辺りへ落ちかかりたると見えて」をpushさえる。雷が子どもの向かったところに落ちたのでは、とあわてている。

4 (1) AとBはともに災難であること、「AがBに退治されて」という部分をヒントに考える。

(2) [C]の直後にある、「くが命拾いにつながったと考えて、『孝童』という…」をふまえる。△大意△を参照すること。

△大意▽

この百姓が木陰で雨をしのいでいたところ、自分の子が来たので、とても驚いて、食事(弁当)をうけとつた。雨もあがり日も暮れそうになったので、「すぐ帰りなさい」と言うと、子は「早く終わらせて下さい」と言つて、先に帰つた。(すると)狼が出て息子の後をつけて野道を行つているのを見て、親は大変驚き、「きつと狼に襲われるだろう」と心配で落ち着いていられなかった。再び嫌いな雷が響くやいなや、子が行つたと思われるところへ落ちたと見えて、(親は)農具を捨ててそこに行くくと、子はおらず、狼が倒れていた。「きつと子も(雷に)打たれたのだろう」と、急いで宿に帰ると、子は無事でいたとのことだ。

△解答▽

- 1 きょう
- 2 オ
- 3 工
- 4 (母に) 時鳥の初音を聞かせたい
- 5 家づとになりしことこそうれしけれ親も待たれし初時鳥

△解説▽

- 1 ① 「けふ」↓「けう」(語頭以外の「ハ行」は「ワ行」に直す。)
- ② 「けう (keu)」↓「きょう (kyo)」
- 2 ア・エの主語は唐磨、オの主語は母親である。
- 3 △大意) 参照。時鳥の初音を母親へのみやげにしたいが「かひなくて(ど)うしようもなくて)」、と残念な思いを捉える。
- 4 空欄下の「願いながら果たせなかつた」という部分が本文「思ひたれど、かひなくて」に当たるので、その直前の内容をまとめる。
- 5 初めに詠んだ短歌の上の句「家づとにならぬばかりぞ恨みなる」の部分を、「家づとになりしことこそうれしけれ」と詠み直している。

△大意▽

錦織唐磨は、幼い時、よそに行つて帰る時、ある山里を通つた。夏の初めであつたので、ほととぎすの初音を聞いて、

家へのみやげにならないのがうらめしい、親もまっているであろうほととぎすの初音

とよんだ。そして家に帰つて母の前に来て、「今日ほととぎすの初音を聞きましたので、家へのみやげになるのであれば、母上もたいへんお喜びになると思つたのですが、しかたがなくて、ただこのような歌をよんで帰りました」と唐磨が言つたところ、母は(それを)聞いて、「ほととぎすの初音を聞くのよりは、おまえがよんでくれた歌を聞くのがうれしい気持ちになりますよ」とおっしゃつた。ちょうどその時、空でほととぎすが鳴いたので、母といっしょに、「あら鳴いたよ」と言つたので、唐磨はとりあえず、

家へのみやげになつたのはうれしい  
と上の句を直した。

△解答▽

- 1 日和見
- 2 ア
- 3 天候を見誤ること(が何度もあつた。)
- 4 くわしく
- 5 自ら経験を積み修行に励むこと

△解説▽

- 1 「父」とは「伊豆の船見某」のことである。直後から、この人物が「日和見(天候を予測する人)」であつたことが分かる。
- 2 「妙」には「たいへんすぐれている」という意味がある。また、傍線部②の直後に「上手なりて」とあるので、アが適当であることが分かる。この父親は元々船頭であり、長年にわたり経験を積んできたので、正確に天候を予測できるようになつたのである。
- 3 空所の直後に「何度もあつた」とあることから、「しかるに度々見損あり」の部分の説明すればよいことが分かる。「伊豆の船見某」の子どもは父から天候を予測する仕事を受け継いだものの、あまり修行をしておらず経験も積んでいなかったもので、何度となく天候の予測を外していたのである。
- 4 語中の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に改めるので、「くはしく」は「くわしく」となる。
- 5 【1】では子どもが日和見を何度となく外す理由(日和見の稽古をしない理由)を「父親の地位や財産を譲り受け、生活が豊かだつたことで、自然と(天候を予測する)修行がおろそかになり、父親から伝承されたことだけに頼つて自分で苦労することもなかつたからだ」と述べている。このことから「何かしらの技術を身に着けるには)みずからが苦労して修行に励むことが大切である」ということを伝えようとして、これが分かる。ただし、問題

には「Ⅰ」と「Ⅱ」の内容をふまえて」とあるので、「Ⅱ」中の「その技術は個人の経験に基づく」という部分をうけて「(技術を身に着けるためには)経験を積むことが必要である」といった内容を解答に盛りこむ必要がある。

### △大意▽

將軍が徳川吉宗のころ、伊豆の船頭をしていたある男を呼び出し、この男を日和見(天候を予測する人)となさった。(この男は)三十年ほどのあいだ、天候を見誤ることが一度もなかった。この男の子どもは、父親の仕事を受け継ぎ、現在、日和見を務めている。しかし、この子は(父親と異なり)天候を見誤ることが何度もあった。父親は元々船頭で長年にわたり海の上を往来し、一生懸命天候を予測することを学んだ人だったので、自然と(天候の予測が)非常に巧みになって上手であった(のに対して)、子どもは父親の地位や財産を譲り受け、生活が豊かだったことで、自然と(天候を予測する)修行がおろそかになり、父親から伝承されたことだけに頼って自分で苦労することもなかった。(だから、このことが)細かなことに心をくだきながら(天候を予測する)稽古をしなかった原因となったのであろう。(このことは)武芸の家の者も、しっかりと心得ておくべきことである。

P 122  
[8] R 4年度

### △解答▽

1 一尺の唐糸

2 ついに

3 (少しの量だから) 何の役にも立たないだろう

4 工

5 (仁兵衛への褒美として) 三百石を与える(こと)

### △解説▽

1 「あの糸切れ」とは、「一尺ほどの唐糸」のことである。土井利勝の言葉の最後に「一尺の唐糸」とある。

2 語頭のない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に改める。よって「つひに」は「ついに」になる。

3 直後に「ちりとなして捨つる(ごみとして捨てる)」とあるので、なぜそのように判断したのかを考える。1行目に「あの糸切れが何の用に立つべきや(あの糸切れが何かの役に立つはずはない)」とある。

4 (1) 7〜8行目に「さやうの辛苦にて出来しものを…捨つるは天罰おそるべきことなり(このように並々ならない苦労のすえにできたものを…捨てることは天罰が下るのを恐れるべきことである)」とある。この部分にあう選択肢は工である。

(2) **B** の直前にある「仁兵衛への褒美として」に注目する。2〜3行目に「仁兵衛に三百石を取らすべし(仁兵衛に三百石を与えよう)」とある。

### △大意▽

「これを見なさい。私をけちな人と呼び、あの一尺ほどの唐糸が何かの役に立つはずがないと(言って)笑う者も多い中、(その糸切れを)大切に持っていたことは大変すばらしいことである。(だから、糸切れを大切に持っていた)仁兵衛に三百石を与えよう。さて、この糸切れが大切である理由を語って聞かせよう。この糸は元々中国の民が(蚕の餌である)桑を取り、蚕を飼い(その蚕の繭で)糸をつくり、(その糸が)商人に渡り、長い航海を経て我が国へ渡り、

(渡ってきた糸を)長崎の町人が大事に扱い、(それを)京都、大阪の商人が買  
い取り、ようやく江戸に行き着いたものである、その大変さはどれほどの  
ものであったかと思う。このように(様々な人々の)並々ならない苦労のすえ  
にできたものを、少しの量だから(役に立たないだろうと考えて)ごみとして  
捨てることは天罰が下るのを恐れるべき(くらい畏れおおい)ことである。今、  
下緒の先を結んだので、私は、(みなが役に立たないと言った)一尺ほどしか  
ない唐糸を三百石で買収したぞ」と言ったそうだ。

P 124 9 R 5年度

△解答▽

- 1 おしえて
- 2 にかはせん
- 3 いま鳴く鳥
- 4 (1) 巢に帰る道に迷ったひなを呼ぶ親鳥  
(2) 特定の鳥

△解説▽

- 1 「を」は「お」に改める。また、語頭にない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に改める。よって「をしへて」は「おしえて」となる。
- 2 6行目に「と答へるにぞ、」とあるので、その直前の「何にかはせん」が「老婆」の言った言葉の部分だとわかる。また、2行目の「むづかしき」といふ人かな」は、老婆が旅人を評して言った言葉である。
- 3 「この鳥のみをしへて、何にかはせん」という老婆の言葉は1行目の「いま鳴く鳥の梢は、いづこなりや、おのれにをしへてよ、」という旅人の言葉を受けたものである。このことから、「この鳥」とは、旅人の言う「いま鳴く鳥」のことだとわかる。
- 4 (1) 中村さんは「老婆は、……」Aのことを呼子鳥と言うのだ……と説明している」と発言しているので、老婆の発言の中からAに対

応する部分を探す。4～5行目に「巢に帰らん道にまどふを、親鳥の巢より呼ぶなるををしなべて、呼子鳥といふなれば(巢に帰る道に迷ったひなを、親鳥で巢から呼ぶ鳥のことをすべて、呼子鳥と言うので)」とある。

- 4 (2) 4 (1)にもあるように、「呼子鳥」とは「ひなを呼ぶ親鳥」のことである。しかし、旅人は「呼子鳥」を「鳥の種類の一つ」と考えていたので「呼子鳥」はどこにいるのか」と尋ねたのである。

△大意▽

(旅人が)「いま鳴いている鳥(呼子鳥)がいる梢はどこか。私に(その場所を)教えてくれ。(呼子鳥の)姿を見て心にとめておき、友へのみやげ話として(その鳥のことを友人に)話そう」と(鳥の居場所を伝えてくれるように)求めたところ、老婆は「めんどろなことを言う人だな。すべての鳥のひなが飛ぶ練習に(巢)を出て(その練習をしつつ)、あちらこちらえさを探し求める(ひなの)様子が頼りなくて、親鳥で巢に帰る道に迷ったひなを呼ぶ鳥のことをすべて呼子鳥と言うので、いま鳴いている鳥(が何という名前の鳥か)のみ教えることに何の意味があるだろうか、いや、ないだろう」と答えたので、(旅人は)はじめて呼子鳥がある特定の鳥(を指すわけ)ではなかったのだと、わかった。

△解答▽

1 かいて

2 ②ア ③ウ

3 「みみづく」を「づく」と省略すること(言葉を短くしようとしたのに、説明のために、かえって文が長くなった点。

4 才

△解説▽

1 語頭がない「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」になおして読む。よって、「かひて」は「かいて」となる。

2 この文章の登場人物は「ある人」と「友達」の二人である。「みみづく」を囷にして鳥を捕まえたのは「ある人」、その人に『みみづく』を貸してほしい」という旨の手紙を書いたのは「友人」である。

3 傍線④の直前にある「それならばはじめより「みみづく」と書けかし」の「それ」の指す内容に注目して滑稽な点を説明するとよい。「友達」は手紙に書く文字数を少なくするために「づく」と書いたものの、その説明を書いたために、かえって手紙の文が長くなったのである。傍線④の直後で著者はこの手紙について「文字をつづめんとして、多くの文字を添へ、詞を短くせんとして、かえりて長くなる事をしらず」と述べている。

4 「このたぐひのはなし」とは、「(友達が手紙を書くのに、)言葉を減らそうとしたが、その説明のためにかえって手紙の文が長くなってしまった」ことを指している。このような意味を持つのは「裏目に出る」である。なお、「一石を投ずる」は「反響を呼ぶような問題を投げかける」、「水をさす」は「うまくいっていることをわきから邪魔をする」、「しのぎを削る」は「相手に負けまいと激しく争う」、「恩を仇で返す」は「恩のある人に対して、恩返しではなく、かえって害するようなことをする」という意味である。

△大意▽

ある人は、みみづくを飼っていて、それを囷にして鳥を捕まえていたところ、同じように狩りをする友達から、みみづくを借りに(手紙が)送ってきたのだ

が、その手紙には「みみづく」の「みみ」を省略して、「づく」と書いてあり、手紙の終わりに『づく』とは「みみづく」のことである。「みみづく」と書けば、文字数が多くなり言葉が長くなるので、「づく」と書く」と、長々と説明してあった。それならば最初から「みみづく」と書けよと(この手紙を)滑稽に思う。文字を縮めようとして(その説明に)多くの文字を書いたことで、言葉を短くしようとして、かえって文が長くなってしまったことに気づいていない。世間の(さまざま)事柄を見ると、これと同じような事が多い。